

「種のたとえ、毒麦のたとえ」

§ 064 マコ 4 : 26~29、マタ 13 : 24~30、マタ 13 : 36~43

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ベルゼブル論争以降、イエスの奉仕の方法が変化した。
- ②イエスの教えは、たとえ話を中心となった。
- ③群衆から真理を隠すため。
- ④弟子たちに真理を教えるため。

(2) 「奥義としての王国」に関する9つのたとえ話

- ①種蒔く人のたとえ (詳細な解説がある)
- ②種のたとえ
- ③毒麦のたとえ (詳細な解説がある)
- ④からし種のたとえ
- ⑤パン種のたとえ
- ⑥畑に隠された宝のたとえ
- ⑦高価な真珠のたとえ
- ⑧網のたとえ
- ⑨一家の主人のたとえ

(3) A. T. ロバートソンの調和表

「最初の主要なたとえ話群」 (§ 64)

2. アウトライン

- (1) 種のたとえ (マコ 4 : 26~29)
- (2) 毒麦のたとえ (マタ 13 : 24~30)
- (3) 毒麦のたとえの解説 (マタ 13 : 36~43)

このメッセージは、種のたとえと毒麦のたとえを理解し、適用するためのものである。

I. 種のたとえ (マコ 4 : 26~29)

はじめに (特徴)

- (1) これは、マルコの福音書だけに出て来るたとえ話である。
- (2) 「奥義としての王国をあるものにたとえると、次のようになる」という意味。

「種のたとえ、毒麦のたとえ」

- (3) 3つの段階が紹介されている。
 - ①種を蒔く段階
 - ②その種が成長する段階
 - ③実を収穫する段階
- (4) 3つの段階すべてに「種を蒔く人」が登場している。
- (5) 第2の段階に強調点が置かれている。

1. 種を蒔く段階 (26節)

「また言われた。『**神の国は、人が地に種を蒔くようなもので、**』」 (26節)

- (1) 人が地に種を蒔く。
 - ①「蒔かぬ種は生えぬ」(上方いろはかるた)
 - ②「Pluck not where you never planted. (植えなかった場所で摘むな)」

- (2) 種とは、みことばのことである。
 - ①種にはいのちが宿っている。
 - ②奥義としての王国は、みことばの種を蒔く時代である。

- (3) 種を蒔く人
 - ①誰であるかは明示されていない。
 - ②種を蒔く人は、能動的である。

2. その種が成長する段階 (27～28節)

「**夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知りません。地は人手によらず実をならせるもので、初めに苗、次に穂、次に穂の中に実が入ります**」 (27～28節)

- (1) 種を蒔く人
 - ①この段階にも登場するが、受動的である。
 - ②種の成長に関しては、無知である。

- (2) 訳文の比較
 - 「地は人手によらず実をならせるもので、」(新改訳)
 - 「土はひとりでに実を結ばせるのであり、」(新共同訳)
 - 「地はおのずから実を結ばせるもので、」(口語訳)
 - ①ギリシア語で「オートマトス」である。
 - ②土地の力ではなく、種のいのちを表現している。

③種は、誰が蒔いたかに関係なしに成長する。

(3) 使 12 : 10

「彼らが、第一、第二の衛所を通り、町に通じる鉄の門まで来ると、門がひとりで開いた。そこで、彼らは外に出て、ある通りを進んで行くと、御使いは、たちまち彼を離れた」

(4) テト 3 : 5~7

「神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みによって、相続人となるためです」

①神秘的な芽生えと成長は、聖霊による新生と成長を表している。

②成長もまた、聖霊の業である。

3. 収穫の段階 (29 節)

「実が熟すると、人はすぐにかまを入れます。収穫の時が来たからです」 (29 節)

(1) 種を蒔く人は、収穫を目的にそうするのである。

①収穫の時とは、世の終わりの時である。

(2) イエスの終末理解

①ユダヤ人たちは、突然登場する神の国への期待感を持っていた。

②イエスは、種蒔きから始める方法を提唱された。

③個人的救いと成長は、みことばの種を蒔くところから始まる。

④地球的レベルでも、同じことが起こる。

⑤少数の弟子たちから始まり、最後は「収穫の時」に至る。

4. 適用

(1) 本物の種を蒔く。

「しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたがたに宣べ伝えているなら、その者はのろわれるべきです」 (ガラ 1 : 8~9)

(2) 成長は神に委ねる。

「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。植える者と水を注ぐ者は、一つですが、それぞれ自分自身の働きに従って自分自身の報酬を受けます」(1 コリ 3 : 6~8)

(例話) ビリー・グラハムの伝道

II. 毒麦のたとえ (マタ 13 : 24~30)

1. 奥義としての王国の特徴

(1) ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。

①その人は、収穫を期待している。

②ところが、敵が夜中にやって来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。

* 毒麦とは、ギリシア語で「ジザニア」。

* いね科の *Lolium temulentum*。

* 明治の初め日本にも入って来た。

* これ自体には毒はないが、麦に混入すると苦い味がする。

(2) 麦と毒麦は、ともに成長の段階を通過している。

①麦と毒麦の見分けがつかない段階である。

②しもべたちは、自分たちで毒麦を抜き集めましょうかと提案する。

(3) 主人の判断

「いやいや、毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょう」(29~30 節)

①収穫の時期になると、区別は容易になる。

②毒麦が先に集められ、束にして焼かれる。

③毒麦がなくなった畑で、麦が収穫され、倉に納められる。

III. 毒麦のたとえの解説 (マタ 13 : 36~43)

1. イエスが象徴的言葉の意味を解き明かされる。

- ①弟子たちが質問をした。
- ②詳細な説明があるのは、「種蒔く人のたとえ」と「毒麦のたとえ」の2つである。

2. 象徴的言葉

「良い種を蒔く者は人の子です。畑はこの世界のことで、良い種とは御国の子どもたち、毒麦とは悪い者の子どもたちのことです。毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫とはこの世の終わりのことです。そして、刈り手とは御使いたちのことです。ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにもそのようになります」(37～40節)

- (1) 良い種を蒔く者は、メシアご自身である。
 - ①メシアが地上からいなくなると、弟子たちがその働きを継続する。
 - ②弟子たちがいなくなると、それ以降の信者たちがそれを行う。

- (2) 畑は、この世界のことである。
 - ①世界宣教が預言されている。

- (3) 良い種とは新生体験をした信者たち、毒麦とは偽の信者たちである。
 - ①ここで、象徴的意味が変化している。
 - ②真の信者もそうでない者も、ともに育っていく。
 - ③この真理は、旧約聖書には啓示されていない。
 - *旧約聖書が預言する神の国は、悪が存在しない信者だけの世界である。
 - *良い種と毒麦がともに育つのは、奥義としての王国の特徴である。

- (4) 毒麦を蒔いた敵とは、悪魔である。
 - ①悪魔は、偽の福音の種を蒔く。
 - ②悪魔は、偽の信者を育てる。
 - ③これらの行為を、隠れて行う。

- (5) 収穫とは、この世の終わりのことである。
 - ①御使いたちが毒麦を集め、それを火で焼く。
 - ②これは、終末の裁きを指している。
 - ③毒麦とは、罪人一般のことではない。
 - ④信者のようであるが、信者ではない人のことである。

3. 適用

「人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行う者た

ちをみな、御国から取り集めて、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。そのとき、正しい者たちは、彼らの父の御国で太陽のように輝きます。
耳のある者は聞きなさい」(41～43節)

(1) 奥義としての王国の理解を深めよう。

- ①ユダヤ人たちがメシアを拒否してから、メシアが再臨されるまでの間のこと。
- ②大雑把に言うと、メシアの初臨と再臨の間のこと。
- ③メシアは地上にいらなくても、王国は続く。
- ④教会時代とほぼ同じ意味であるが、教会時代よりも少し長い。
- ⑤真の信者と偽の信者がともに存在する時代である。
- ⑥真の教会と偽の教会がともに存在する時代である。
- ⑦「教会なのはどうして〇〇なのですか」という問い
 - *奥義としての王国では、これが当然である。
 - *教会の中に偽者がいるのは、悲しいことである。
 - *しかし、信仰者を追い出すのは、もっと悲しいことである。

(2) 終末論の理解を深めよう。

- ①「世の終わり」(40節)とは、奥義としての王国が終了する時である。
- ②ユダヤ人たちがイエスをメシアとして信じ、メシアが再臨される時である。
- ③それまでは、本物と偽物を区別するのが難しい時代である。
- ④この期間は、福音による普遍的勝利が実現しない時代である。
 - *無千年王国説は誤りである。
 - *キリストが地上で王として統治することはない。
- ⑤メシアの再臨の時、毒麦の人たちは裁きの時を迎える。
 - *「泣いて」とは、精神的な悲しみである。
 - *「歯ぎしりする」とは、肉体的な苦痛である。
- ⑥信仰による義人は、千年王国で太陽のように輝く。